

中国とゆかりのある方々による座談会

○天野国際課長 皆様、本日はお集まりいただきまして、ありがとうございます。定刻になりましたので、座談会を始めさせていただきますと思います。

私は、長崎県国際課長の天野でございます。よろしくお願いいたします。

ただいまから、中国とゆかりの深い方々によります座談会を開催いたします。

座談会の開会に先立ちまして、座談会の主催者であります長崎県知事 中村法道からご挨拶を申し上げます。

○中村知事 開会に当たりまして、一言ご挨拶を申し上げます。

朱建栄東洋学園大学教授をはじめ、各報道機関の皆様方には大変ご多忙の中、こうした座談会にご参加をいただきまして、心からお礼を申し上げます。県民とともに皆様方のご来県を心から歓迎申し上げる次第でございます。

そしてまた、李文亮総領事、そして王國雄長崎華僑総会会長、そして森永玲長崎新聞社統括報道部長におかれましては、大変ご多忙の中、この座談会にご出席をいただき、心からお礼を申し上げます。

さて、皆様ご承知のとおり、今日、日中関係は大変に厳しい状況に直面をいたしているところでありますけれども、ご承知のとおり、長崎県というのは、これまで長きにわたって日本と中国との友好交流の関係構築に大変大きな役割を果たさせていただいてきた県であります。常に日本と中国の友好交流と信頼関係の構築に向けて、その結び目として役割を果たしてきた歴史がございます。そういった中で今のような状況を考えます時に、長崎県として何か両国の友好交流の回復、拡大に果たす役割がないだろうかと常々考え、悩んでいたところでございました。

そうした中で、先般、朱建栄先生が、当地長崎にお越しいただき、ご講演をいただいたところでありましたけれども、そうした縁（えにし）をもって長崎と中国の関係についてご理解を賜り、今回のような座談会、シンポジウム等を開催してはどうかとのご提案をいただいたところであります。そういうことで、皆様方にこうした機会をいただき、大変意義深いことであると感謝を申し上げているところでございます。

ここで少し、長崎県と中国とのゆかりについてお話をさせていただきますと思います。長崎県が中国の歴史にはじめて登場いたしますのは、3世紀の頃、魏志倭人伝に、長崎県の離島であります壱岐と対馬が登場をいたします。特に、壱岐は平地に恵まれた平べったい島でありまして田畑に恵まれた島でありますけれども、対馬は非常に急峻な地形でありまして、良田なし、立派な田んぼが全然ない、そのために南北に貿易を重ねて生計を維持している。それで、人が通る道は、まさにけもの道のような表現が見られるところであります。

その後、長崎県が登場してまいりますのは、7世紀以降の遣隋使、遣唐使の頃であります。

いろんなルートで日本から中国に渡ってまいりましたけれども、北部のルートを通る時には、壱岐対馬を経由した航路もありました。中間の航路を通る時には、長崎県の五島列島を最終寄港地にして中国大陸に渡ってまいりました。五島には、今も「辞本涯」という空海和尚が残した石碑も残されているところでもあります。

そしてまた、さらにその後、唐がなくなりまして、民間レベルでの交流が盛んに行われていくわけでありまして、16世紀、王直という、いわゆる朱印船貿易に活躍した人たちも、長崎の平戸あるいは五島を本拠地に貿易を行っていたとされているところでもあります。

その後、ご承知のとおり、日本は鎖国政策をとりまして国を閉ざしてしまいましたけれども、唯一、長崎県だけは海外に開かれた窓口として中国やオランダとの交流を重ねてまいりました。

当時は、中国の方々は長崎市民と同じような町なかにおいて生活を送っておられたということでありましたけれども、ご承知のとおり、オランダとの貿易拠点が出島に限定されてまいりました。そうした時期に中国の方々は唐人屋敷という居住区を定めて、そこで生活を送っておられたということでもあります。この規模から類推いたしますと、約2,000名の方々が居住されていたのではないかと推計をされているところでもあります。

ちょうどそうした時期に華僑の皆様方が長崎に越してこられました。現在、長崎の町並みの中には、新地中華街あるいは唐寺、さらには孔子廟といった中国ゆかりの町並みも見られるところでもあります。あるいはそうしたハードのほかにも、ちょうど今開催されておりますけれども、長崎ランタンフェスティバルということで、中国の旧正月をお祝いするイベントが開催されておりますし、もうしばらくたちますと、春先には長崎ペロン選手権大会という船をこぐ競争をする大会がございます。これも中国ゆかりのイベントでありますし、長崎ならではの風物詩であります精霊流し、これも爆竹を鳴らしまして故人を送るという、まさに中国色の強いイベントでございます。そして、秋には400年の長い歴史を持っております長崎くんちというのが、これは諏訪神社に奉納される伝統芸能でございますけれども、この奉納踊りの中にも中国の色彩が非常に色濃く残されたものが今日に伝えられているところでもあります。申し上げたように、まさに長崎には今ソフト、ハード両面で中国の色彩が色濃く残されているところであり、そうしたさまざまな文物をお楽しみいただくために多くの観光客にもおいでいただいているところでもあります。

そしてまた、時代は下りまして、長崎が開港いたしまして居留地が築かれてまいります。そういたしますと、また各国とのさまざまな貿易が展開されてまいります。特に1923年から1943年には、長崎と上海を結ぶ定期旅客航路も開設をされました。この航路は、実に日本から海外においでになれる方々の4割の方がこの航路を使っておられたということでもあります。今日、長崎のおじいちゃん、おばあちゃんにお話を聞きますと、修学旅行には上海に出かけていたというお話でありますし、今にも「東京に行くには水杯（みずさかずき）で、上海に行くには下駄履きで」という言葉が残されておりますので、その日にとれ

た魚は、翌日には上海の店頭に並べられていたということでもありますので、いかに上海が身近な存在として長崎県民に愛され、また、さまざまな事業が展開されていたのかということをおうかがい知るところであります。

実を申しますと、昨年、ちょうど辛亥革命 100 周年ということもございまして、孫文先生と国境を越えた厚い友情で結ばれ、孫文先生と辛亥革命を生涯にわたって支援した長崎出身の実業家であります梅屋庄吉、この 2 人の真の友情関係に光を当てて、さまざまな企画展を開催したところでありましたけれども、そうした時期のことを振り返ってみますと、100 年前の長崎と今の長崎を比べてみると、どちらが国際的な町だったんだろうかと改めて反省させられるところでもあります。

こういったことで、これからは長崎をもっともっと国際化に力を注いでいかなければいけないし、そしてまた、国際的な舞台の中で活躍できるような人材の育成にしっかり取り組んでいかなければならないと考えているところでもあります。

また、日中国交正常化 40 周年を迎えたところでありましたけれども、こうした国交正常化の時も、長崎は独特の役割を果たささせていただきました。国交正常化が 1972 年でありましたけれども、実はその 1 年前に、当時の知事であります久保勘一知事は、全国の自治体に先駆けて「中国は一つである」という宣言を行いました。そして、併せて長崎県議会では、「日中国交正常化並びに貿易促進に関する要望決議」というものを全国の自治体に先駆けて特別の議決を行い、そして、国交正常化が実現するや、その翌月には友好使節団を中国に派遣するという取組を行ってきたところでもあります。そうした長い友好交流の歴史に培われ、長崎県民の皆様方は非常に中国を親しく感じているところでありまして、今日の事態を大変憂慮しているところでもあります。何とかこれから両国の友好関係の改善のために、長崎として何らかの役割を果たせないだろうかと考えていた矢先にこうした機会をいただき、大変ありがたいと思っているところでございます。

今日は、どうぞ忌憚のないご意見等をちょうだいできますようお願いを申し上げます。開会に当たってのご挨拶とさせていただきます。本日は本当にありがとうございます。よろしく願いいたします。(拍手)

○天野国際課長 続きまして、中華人民共和国駐長崎総領事館総領事 李文亮様からご挨拶をお願い申し上げます。

○李総領事 皆様、こんにちは。ご紹介していただきました在長崎中国総領事館の李文亮と申します。

私から挨拶という命令ですが、今日は主にはやはり皆さんの方からいろいろお話を聞かせていただきたいと思っております。確かにさっき知事もおっしゃったように、今、中国と日本との関係が非常に芳しくない。特に北京から見ても、また日本の東京から見ても、どうもいい雰囲気じゃございませんが、それと違ひまして、長崎の方では去年の 9 月半ば以降、

全然影響がないわけでもないんですが、例えばさっき知事も少し触れましたが、去年開通されました長崎 - 上海間の上海航路が、残念ながら、今、運休状態になっております。でも、それ以外は、東京とか北京とかでは、去年、国交正常化 40 周年に関する記念イベントとかはほとんど取りやめか、また延期の状態になっております。それと比べましたら、長崎の方では順調に記念行事とかいろいろ展開されております。それで、ちょうど今、中国の方では旧正月、春節が、今日は 9 日目でもう終わっている段階ですが、長崎の方ではまだ続けられている状態でございます。本当に私に言わせれば、中国でない、でも中国以上に中国的な文化、色彩がこの長崎の街中にあふれ出ております。非常にすばらしいことでございます。

では、なぜ長崎ではそういうことができるのでしょうか。それはやはり、理解と信頼にあるんじゃないかなと思います。相互理解と相互信頼。そのためにもぜひ長崎以外の日本人の方とか、中国の方に長崎にお越しいただきまして、実際この目でいろいろ確かめて、長崎の日中に関するこの雰囲気を感じて、この勢い、この雰囲気、この情熱を日本全国、また中国全国に広めていただければいいんじゃないかなというふうに考えております。

そして、いかにしてこの不正常な両国関係をできるだけ早目に打ち切って、本来あるべき姿に戻していったらいいか。それも皆さんの方からもいろいろ貴重なご意見をちょうだいして、これから長崎のこういったことを中国、日本全国にいかに発信したらいいのか、そのご意見もちょうだいしたいと思ひまして、今日、先ほど知事もいろいろおっしゃいましたが、そういう趣旨でやったことでございます。

以上をもちまして私の挨拶といたします。どうもありがとうございます。(拍手)

○天野国際課長 ありがとうございます。

なお、今回、この場にご出席予定でございました宮本雄二元中国大使が急な用務が発生いたしまして、やむを得ずご来県いただくことができなくなりました。宮本元大使からは、今回の座談会に対しましてメッセージをいただいておりますので、皆様のお手元に配付させていただいておりますので、ご紹介申し上げます。

あわせて、長崎県と中国との交流に関する取組の資料、それから昨年、長崎県を特集いただきました「人民中国」の昨年の 5 月号をあわせて配付させていただいております。詳細の説明は割愛いたしますが、ご覧いただきまして、座談会の材料にいただければ幸いです。

それでは、座談会の進行につきましては、座談会を企画していただきました東洋学園大学の朱建栄教授にお願いしたいと思います。よろしくお願ひいたします。

○朱座長 私は、今日の座談会のコーディネートを務めます東洋学園大学の朱建栄と申します。どうぞ最後までよろしくお願ひいたします。

既に、知事と総領事の方から、今回の懇談、座談会の経緯、趣旨について説明されまし

たけれども、私の方から、またもう少し付け加えて説明いたしたいと思います。それをもって今日の懇談の意義ということをもっと理解していただけるのではないかなと思います。

去年の末に長崎新聞で講演する機会を得まして、そこで李文亮総領事、また、新聞社の方々から、長崎県、長崎市と中国との文化交流、いろんな歴史的な交流のことを紹介していただき、本当に感動しました。ちょうど今の日中関係の難しい折に、どのように長崎からヒントを得て、良好関係の打開に努力すればいいのか、切り口を見つけるかということで、ぜひ今回多くの方に長崎にお越しただいて、一緒に考えてみようという考えを持ちました。

その後、宮本大使と話をしましたところ、大使からも非常に賛成を得まして、当初はこの時期に、今年は日中平和友好条約の35周年ですけれども、今年一番手の平和友好条約記念のシンポジウムをやりましょうというようなことを大使から提案がありました。私もそのための企画書も準備したんですけれども、ただ、時期的にちょっときついことと、ちょうど長崎県の議会が今始まったところというようないろんなこともあって、シンポジウムそのものは改めて5月、6月以降に考えることにいたしました。しかし、このランタンフェスティバルを見ながら日中関係を考えようと、そのような趣旨を受け継ぎまして、県庁の方がわざわざ東京まで訪ねてくださって、そこで今回の懇談、訪問ということを行いました。

実は、ちょうどほぼ同じ時期に、私の隣にいる日本経済新聞の後藤さんが、今の日中関係を心配してしまして、日中双方の有識者が、東京、北京から離れて、別の違う角度から日中関係を考えてみようというような考えも受けました。それなら、今回一緒にここでやろうということで皆様に声をかけまして、賛同を得まして、今回の会合に至って本当によかったと思います。知事が一番お忙しい中で、今日わざわざ座談会に出席していただくことと、総領事が時間を割いていろいろ案内してくださって、本当に長崎さるくの名誉ガイドというような形で今日はいろいろ解説してくださって、それは私たちの長崎に対する理解ということを深めるのに本当によかったと思います。

では早速、今日の座談会の趣旨について私なりに感じたことを申し上げます。

私たちが今回の座談会に参加して、訪問全体を通してできることは3つあるのではないかなと思います。第1、私たち自身がこの長崎をもっと理解することです。今までは通り一遍に表面的に長崎を見ることは、大半の方が2~3回あるいはそれ以上に来たことはありますけれども、今回はより内面から、より深いところから長崎を知ること、理解すること、それを私たち自身も願っています。第2に、このような長崎に対する理解を通じて、そこから日中関係をどのように打開していくのか、今後もっと良好な、健全な日中関係に発展させていくのか、この長崎の場を借りて一緒に考えて、この長崎から日中関係を打開するヒントを得ること、一緒に考えること。3番目に、私たちは長崎にせっかく参りましたので、一緒に長崎と日中交流というところについて、私たちなりに微力ながら少し提言ができればということも願っております。

今日、このような趣旨をもって、早速、これから懇談、座談会の方に入りたいと思います。要約して主に2つのセッションに分けて一緒に討論に参加していただこうと思います。

まず第1、現下の日中関係において、長崎県がどのような役割を果たせるのか。また、長崎とこれからの日中交流はどういうことができるのか。実際に長崎と中国との交流、定期航路も一旦中止していますし、それを含めて打開策。さらに、中国との交流を強化していくこと、そういうことについて皆様から何かお知恵、アドバイスをいただければと思います。後半は、長崎での私たちの短い滞在及び今まで受けた説明を踏まえて、長崎から日中関係の改善及び互惠関係の進化、発展にどのようなヒントがあるのか、日中関係をこれからどうしてよくしていけばいいのかということと一緒にまた考えていきたいと思います。

では、早速ですけれども、まず前半で、今の日中関係において長崎県がどのような役割を果たせるのか。また、長崎県と中国の交流に何か助言、提言があれば、それもいただきたいと思います。

今年は日中平和友好条約調印後35周年、正式にはまだ公表されていませんけれども、去年から予定されている新日中友好21世紀委員会が近いうちに長崎で開かれる予定です。それを踏まえて皆様から何かご提言いただければありがたく思います。よろしく願います。

○日本経済新聞社 後藤氏 では、口火を切る形で、私は1997年から2000年まで北京に駐在しておりまして、その後、帰ってから論説委員を5年間、そしてアジア部長を3年間やりまして、ずっと中国、アジアの問題を見ております。今は編集委員をやっております。

その観点から、朱建栄先生のテーマとはちょっとずれる部分もありますけれども、3つだけお話ししたいのは、一つは、今、日中関係、私がこの十数年見てきた中では最も危険な状態にあると思います。それはなぜかということ、ビジネスマンとリベラルな知識人が反中に非常に傾いているということなんですね。フランスの歴史人口学者のエマニュエル・トッドは、最近、ナショナリスティック・リベラルということを書いていまして、リベラルな人がナショナリスティックになっているということで、これは世界共通の傾向なんですけれども、日本でもそれが見られると。

私は今、テレビ番組を幾つかやっているんですが、先々週、タイに行っていて、日本人ビジネスマンが中国を脱出してアジアに行くという話を取材してきて、今晚、実は放映されるんですが、残念ながら長崎はテレビ東京系列がないので見れませんが、そのビジネスマンの状況で見ると、とにかくもう中国は嫌だと。中国には今、2万8,000社、日本の企業が進出しておりますが、このままいけばその半分は逃げ出すというような勢いだと思います。タイは今、7,000社おりますけれども、それが倍増しそうな勢いで来ている。これは極めて危険な状況であるということがまず第1点。

これを防ぐにはどうすればいいかというと、やはりもう上の方でやるのは時間がかかる。下の方から盛り上げていかなければいけない、いわゆるトラック2をやらなければいけない

いということなんですね。その中でも一つの鍵は、ローカル・ツー・ローカルだろうと思います。それはやはり長崎県とどこかとか、中国の同じような、あるいは長崎と現地とがお互いに学び合えるような中国の自治体との交流、あるいはそのレベルでの人の往来というのが非常に重要になってくるだろうということ。

3点目に、ただ通り一遍、若い人を交流させればいいのか、人を相互派遣をすればいいということで解決できるようなレベルではなくなっていると思います。今必要なのは、中国が必要とする日本、日本が必要とする中国ということをお互いに共有し合うということなんですね。それは、例えば日本が過去経験してきたこと、特に地方自治体あるいは地方都市として経験してきた、これはもう我々が中国に伝えるべきことがあるんじゃないかということなんですね。例えば、環境対策というの、もう私も50を超えていますので1つ言えるのは、あれは昔日本で見た光景だなということです、今、中国が悩んでいる大気汚染にしても、1967年に日本が環境基本法というのをつくった。その時に、まさに東京は今の北京と同じような状況だったわけで、北京と東京が学び合えるのであれば、長崎は同じような問題を抱えている中国の都市とお互いに学び合うことができるのではないかと。そのテーマとしては、例えば今の環境もありますし、エネルギー -、これは広義のエネルギーという意味ではなくて、もっと自治体として取り組めるエネルギー問題、あるいは都市化の問題、それも1,000万人を超えるような都市の都市問題というよりは、ローカル都市、50万人なり30万人なり、あるいは80万人とか、そういう都市が抱える都市問題の共有、あるいはそれぞれの都市が抱える高齢化の問題、そういう問題に対してお互い学び合う場があることが、実は関係の緊密化、関係の改善につながるのではないかと。精神論として日中関係は大事ですよという領域はもう超えている。今の事態は非常に深刻であるというふうに受け止めていかなければいけないというふうに思っております。

○共同通信 岡田氏 共同通信の岡田と申します。

長崎にお邪魔する前に平戸市に行ってまいりました。初めてです。私はもうOBなんですけれども、まだ論説を時々書いているんですけども、現役時代、実は台湾台北支局の支局長をやっておりました。その時から長崎県平戸市というのは私の頭から離れない一つの市として記憶しております。皆さんご承知のように、台湾でも中国でも、鄭成功さんは民族の英雄として大変尊敬され、評価されている。鄭成功が台湾をオランダ、ポルトガルの支配から解き放った時に、一体どこから出航して、どうやって台湾に来たかということ一度調べたことがあります。あの時、鄭成功が出航した港は、まず福建省廈門市から出航されたということで、すぐ隣に金門島という島があります。これは今、台湾が実効支配している島でありまして、中国と台湾の内戦当時は血で血を争ったところなんですね。この金門島の一番南、今、飛行場のあるあたりから鄭成功は数百隻の大船団を率いて台湾に、最終的には台南市にあるオランダ軍の要塞に攻め入って台湾を解放する、そういうことでもありました。

日本人に鄭成功がよく知られていて好きだという理由の一つは、鄭成功を描いた「国姓爺合戦」という戯曲、江戸時代の戯曲でありますけれども、これがあるから鄭成功は比較的知られておりますけれども、ぜひ鄭成功の生まれた地を訪ねたい、今回まさしくいいチャンスだということで、昨日 1 泊して行ったわけです。彼は 7 歳まで平戸で生まれ育ったようです。幼い頃の名前は福松。だから恐らく近くの子供と遊ぶ時は、「福ちゃん」とか言われていたんじゃないかと思うんですね。その福ちゃんが 7 歳の時に初めて、既に廈門に戻っていた父親を追って福建省に行くわけですけれども、そういう非常に古い長崎県と中国との関係のゆかりを調べたり、考えたりするたびに、先ほど中村知事がおっしゃった 100 年前の長崎と中国と、今の長崎と中国はどっちが国際化しているのか、こういう問いかけがあったわけですけれども、ちょうど鄭成功が、7 歳の時の福ちゃんが中国に渡ったのが 400 年前ですが、400 年前のこの東シナ海というのは、実に自由な海、人が往来する非常に自由な環境の中で、極めて国際的な町として長崎は恐らく周辺、明、清あるいは朝鮮半島から見られていた。100 年前も重要だけれども、もうちょっと歴史のスパンを長くにとって 400 年前の歴史のロマンを考えると、我々長崎と中国との関係を、もうちょっと思考やわらかくして考えた方が我々の将来のためになるなというようなことを考えながら、今朝、平戸を後にしてこちらに参りました。

朱建栄先生に与えていただいたテーマに直接答えることにはなりませんけれども、とりあえず、平戸に行った報告を兼ねて私の話を終わります。

○TBS 松原氏 TBSの松原でございます。私、空港を降りたのが 12 時半過ぎぐらいだったか、もっと過ぎていたかな、それからまだ 5 時間しかたっていないんですが、ああ、来てよかったなと心から実は思いました。李総領事の自らのガイドで圧倒的なおもしろさに本当に圧倒されて、こんなに長崎と中国というのは心の交流がずっとあったんだということに改めて再認識しました。

僕ら、テレビのニュースも、例えば 10 年前、20 年前を考えると、毎日のようにアメリカのニュースがある。アメリカがくしゃみをしたらニュースになるという時代があった。しかし、今では、本当に中国のものというのはどんなものでも、小さなものでもネタになるというか、もう圧倒的に中国のニュースが多いわけですね、テレビの短いニュースの中でも。ただ、その中身はというと、大抵が経済的な脅威である、GDP が日本は抜かれてしまった、日本は大丈夫なのかということであったり、あるいはこの 1~2 年の領土問題で何かがあったら、それで朝から晩まで、最近はテレビもニュースだけでなくワイドショーなんか時事ネタもやりますので、1 日じゅう、ある種、洪水のように危機を、反省を込めて言ったら、煽ってしまうという報道の仕方をしてしまう、結果的にはそうになってしまう部分があって、ついその中で忘れてしまうのが心のつながりであるということ、今日は本当に自分の反省も込めて、この短い時間ですが、既に感じております。

そうした中で、こんなに古く、例えば江戸時代に長崎に 6 万人いて、その時に中国人の

方が1万人いたと。つまり、6人に1人は中国の方だったということも、ごめんなさい、僕は全然知らなくて、まず、日本人が長崎と中国の関係を知ることが大事だと。だから、正直言うと、僕はこれを長崎モデルと名付けてもいいんじゃないか。言葉というのは本当に大事で、「財政の崖」というのも何か危機があるんだなと理屈で聞くと大変なことだとわかるんだけど、忘れてしまう。ただ、「財政の崖」という言葉があると「財政の崖」と世界じゅうで言って、そのことをみんなが考えるようになる。そういう意味でも長崎と中国はこれだけいい関係を築かれてきて、心のつながりも深いとなると、例えば長崎モデルという言葉じゃなくてもいいんですが、何か象徴するようなキーワードみたいなものをつくって、もっと日本人がまず長崎と中国の関係を知るといようなことを始めてもいいんじゃないだろうかということを見ながら考えておりました。

そして、もう1つ感銘を受けたのは、李総領事に教えていただいたこと、そして長崎新聞の森永さんの記事にもあったんですが、乙女の像の裏側に書いてある胡耀邦さんの言葉であったり、こういうことも実に深い言葉であるのに我々は全然知らなかった。まず、日本人が長崎に何があるのか、長崎のケース、長崎の歴史、中国との歴史を知ることからスタートしてもいいのかなということを見ながら考えておりました。漠とした発言ですが。

○朝日新聞 吉田氏 朝日新聞の吉田と申します。今日お話を伺って、いろいろ見せていただいて思ったことは、アジアとは一体何なのかといろんなことを考えるんですけども、アジアの東アジアの端っこに日本は位置しているわけですけども、日本の場合、海を挟んで、とりわけ中国、朝鮮半島あるいはロシアと海を挟んでつながっている特徴があると思います。もちろん陸でつながっているアジアの国々もありますが。そのずっと開いてきた場所が長崎。逆に言えば、長崎で開いてきたのは、日本は閉じることができなかった、長崎は閉じられないという恐らくニーズがあったんだろうと思います。

先ほど岡田さんの方からお話がありましたが、そういう海でつながる大陸と島とか、あるいは人々というのは、やはり往来することが一番楽しくてアドベンチャーとして、そこにビジネスが生まれて新しい文化が生まれてということの繰り返しなんですね。だからこそ、この長崎が特徴的な存在であり続けてきたと思います。それはやはりアジアのある種の特徴が凝縮されているまちだからこそ、今も賑わっているし、外からも含めて魅力を感じるんだと思います。

そう考えますと、今、何が東京で起きているかということ、仲よくすることとか、往来することとか、いわゆるアジア的な日本とはダイナミックなつながりをむしろ活かさない、そういう普通に仲よくすることがタブー視されている。ナショナリスティックになる方がむしろ格好よく見えて、軸がそっちに振れている。でも、それは一般的ニーズと非常に実はずれている、長い歴史の中でいうと、それは非常に感じました。ただ、これは一方的に思ってもしょうがないことですね。ですから、中国の皆さんにも上海と長崎のつながりと

いうのを考えてもらうと、やはり中国と日本との関係は、仲が悪かった時期もあるでしょうけれども、いい時期もあるし、その繰り返しだと思うんですけども、大事ななと思っています。

もう一つは、平和公園を訪問させていただいて、やはり長崎のメッセージは、被爆地は長崎で最後にしようということが一番大きなメッセージなわけですから、戦争が起きた場合のリスクというものを軽く見えてはいけないと思うんです。どうも今のナショナリズムはそこをすっ飛ばして強がり言う。強がっているうちに、言っているばかりで、どこかで仲よくしようということがタブーになって、その先にあるリスクというのは大変大きなものがあるといったことをもう一度思い出すためにも長崎から発信することは重要だし、そのメッセージは中国の皆さんにも聞いていただきたいなというふうに思います。

○神戸大学 王(柯)氏 神戸大学の王柯と申します。今回、2年ぶりに長崎に来て、いろいろ感じております。非常にすばらしい総領事に会いまして、いろいろ話させていただいて、本当に今日は、ありがとうございます。

私は、実際、歴史を研究する者として、華僑にも非常に関心を持っていました。華僑のことを研究するために長崎にかつて2回伺っております。前に来たのは、長崎と中国との由来をまとめて紹介する本を書きたいということなんですね。これは非常に大変なことであります。というのは、私は基本的に近代史を研究しております。民族主義、ナショナリズムというものは非常に怖い、非常にリスクが高いと思います。しかし、長崎に来るたびに感じていることは、まさに近代的なナショナリズムを克服する方法が見つかるのではないかと感じています。

話が少し戻りますが、私は一人の教育者として、非常に感じてきた風潮がありまして、特に学生の場合、中国に対する親近感が非常に減っているというか、あるいは中国に対しての興味というのがどんどんなくなっているということを非常に感じています。

実際、私は、この4月1日から神戸大学の中国の事務所長、センター長を兼務することを命じられました。今まで国際交流の副学長をやっていました。しかし、副学長はやってなかなか進展がない。むしろ中国に留学する学生が毎年減っています。さらに中国から来る学生も減っております。もう一つの大きな背景で言うと、皆さんご存じかと思いますが、中国では実際日本語を履修する学生もどんどん減っているんですね。このことは単なる中国だけではなく、韓国においてもこれは起こっています。日本語教育、そして日本研究に従事している先生方は非常に危機感を抱いています。何年かたてば、あるいは長くいると私たちの職場さえ失うのではないかとあります。

私は、日中関係を学生に対して教えて、今年は私のゼミに12人の学生が来まして、12人の学生に、今の日中関係はどういうふうになればよくなるかという、最後の仕事というか、それを彼らに課したわけですね。さすがに若い者たちはいろんなアイデアを出して言ってくれました。例えば、1人の学生はこういうふうに言っています。どういうことかという

と、両方の出資によって合併の会社をつくって、役員は日本人と中国人を両方一緒にする。これは当然今までありますから、さらに持ち株をみんな 50%にすれば一緒にの利益になるだろうというふうに言っています。それは一つの小さい会社のことではありますが、しかし、民間が交流していく上で非常に役に立つと。

長崎では、私が来るたびに感じたことがあるんですが、今、岡田先生のお話の中にもありましたように、例えば鄭成功です。中国の人はみんな、鄭成功は中国人であるというふうに考えています。実際、鄭成功は中国人であり、母方は日本人であるということはほとんどの中国人が知らないことです。

つまり、近現代以前は、先ほど岡田先生のお話の中にもありました。何百前、人々は国籍、国境という意識を持っていたか。これはほとんど持っていなかったんですよ。本当にずっと近代まで意識ができたのは 1906 年前後ですか、つい最近のことです。なければ本当にみんなかえって仲よくすることができました。孫文もここで、さっき、李総領事の紹介でもありましたように、本当に自分の母なるような梅屋庄吉とつき合うことができます。

私、基本的に言うと、松原先生の 1 つの提案に賛成します。つまり長崎モデルをつくるべきではないかというお話がありました。私は長崎モデルにすれば、ぜひ今の近代国家を乗り越えるような新しい私たち一人ひとりのつき合いができるようなモデルにしてほしい。つまり、今の国籍、国境を忘れるようなことを長崎からもう 1 回発信すること、提唱することができないだろうか。つまり、長崎は中国の国交の回復を呼びかけました。今日では長崎はつまり、あなたは中国人、私は日本人ということを忘れる、民族、国家を超えるような新しいシステムをつくることを提唱すれば一番いいモデルになるのではないかと私は考えています。

○中文導報 張(石)氏 中文導報の張石でございます。今、私の考えでは、日中の島についての争いですが、レトリックの争いではないかと考えております。なぜかという、棚上げがあるかどうか。例えば毎日新聞は暗黙的な合意があると。朝日と産経新聞は合意がないと。例えば、読売新聞は以前の報道を見ると、やはり合意があると言わんばかりの報道はたくさんありますけど、今やはりないと言わんばかりの報道がたくさんあります。この争いは私から見れば余り意味がない。要するに、中国の古代の哲学者、荘子が言ったように、これはカタツムリの角での争いでやはり広い見地を忘れちゃったんです。要するに、日中の場合といえ、1 つの島の争いで広い分野の利益は全部忘れちゃったと、私はそう思います。

このレトリックの争いをどのように解消しますか。相互理解、相互信頼の実際の行動によって解消できると思います。私は、今日長崎に来て、長崎はこの行動をやっているかなと深く感じております。長崎はどのように日中の相互理解と相互信頼を促すかという、私の考えでは、やはり文化、長崎は特有の文化、特に中国と縁が深い文化を活

かしていただきまして、いろいろな交流を促進すれば、日中にとってもためになるかなと考えております。

例えば、先ほど私はちょっと見たんですが、中国の隠元について、中国の黄檗宗を日本に伝えてきて、後で西日本で広がっていきました。日本の禅宗の三大宗派の一つになっていったんですね。今、中国は禅がブームになっております。例えば、先日、鈴木大拙先生の「禅と日本文化」を翻訳したんですね。隠元は宗教だけじゃなくて、食生活とか野菜とか、たくさんの中国文化を日本に持ってきたんですね。今のインゲンは、私たちが食べた野菜はインゲンと言いますね。例えば、長崎は「隠元と日本の文化」というテーマで旅行を中国で組み立てたら、多分たくさんの中国人がやってくるかもしれません。逆に、例えば隠元の黄檗宗のルーツをたどる旅行を日本で組み立てたら、多分日本の皆様は喜んで中国旅行に行くと思います。長崎は日本の文化に対して、中国経済にとっても、文化交流にとってもためになるかなと考えております。

〇ＣＣＴＶ大富 張（煥）氏 ＣＣＴＶ大富の張煥琦と申します。今回、実は長崎は２回目です。３年前の今と同じ時期ですが、ＣＣＴＶで春節というテーマで、中国だけじゃなくて、世界じゅうのいろんな国の人はどういうふうに通ぐすのか、そういうテーマがあって生中継をやりたいと、ちょうど李総領事が長崎の総領事になって、李総領事がぜひ長崎に来てくださいと、それで来ました。３日間ぐらいでしたが、驚きました。その時、カメラを回しまして、島の問題もなく、純粋に驚きというか、感動もあり、そういう気持ちでいっぱいでした。

もちろん中継も非常にいい映像を出して、それなりの反応はありましたが、自分の中で１つ大きな疑問もありました。長崎の今のランタンフェスティバルも含めて、たくさんの日本人と中国人と一緒に生活している。それは中国、オランダも海外の交流の中でやってきましたが、それで発展してきました。ところが、そういうことが今の中国人は皆わからない。私は、テレビの仕事はずっとやっています、それでもわからないということは、もちろん私の勉強不足でもあります。一方、このランタンフェスティバルは長い間、本当に長崎としては日本人もがやってきたのか、そうじゃないのか。それは３年前、とても感じました。だから、国際課の方にも言いましたが、もう少し中国で長崎のアピールをしたらどうでしょうか。そういうことをすると、中国の皆さん全員とは言わないですが、少なくとも長崎のこういう行動力を感動する人はたくさんいると思います、特に若い人は。そういうことは本当に今までどれくらいあったのかわかりませんが、３年前、我々がやったのが初めてでした、ＣＣＴＶが。それが１つです。

それで、今回来まして、バスの中で総領事と話をしました。島の問題がありまして、相変わらずやっているとか、さっき後藤さんからとても意義深い話がありましたね。今、日本のビジネスマンとか、中国のことが好きじゃないと。それは本当にそうです。実は中国でも同じ。みんな日本の機械は嫌だ。別にこの商品がいいとかそういう問題じゃなくて、も

う嫌だという人もたくさんいます。長崎に来て、本当に盛り上がり、総領事に質問した。長崎の方はみんなどういう気持ちでやっているのか。本当に中国のことを嫌じゃないのか。李さんは、それは嫌じゃないと。これは非常に私は感動したんです。今、これが新しい時代の流れ、新しい両国関係、これから多分始まると思います。今、40年で1つの形ができました。これからどういうふうになっていくのか。本当に40年間よかった。ただし、これからの40年間、同じ形でいいのか。実は今回の島の問題は私も個人的にいろいろ何か違うんじゃないかと思っています。

だから、長崎の役割というのは、本当に隣村としては何千年の歴史の中で一緒に生活してやってきましたから、お互いにプラスになっている。長崎の皆さんは、本当に今の島の問題があって、政府の国有化もあって、マスコミは報道というか、東京で局の方と話をして、今、マイナスの番組ばかりやって意味がないんじゃないか、もう少しプラスの番組をやったらどうでしょうかというお話をした時に、それはやりたいけど、人気がない、見る人がいませんよ、視聴率がとれないと。考えたら確かに。ところが、この長崎ではこういうことはありません。ならば、これは非常に大きな意味があると思います。

隣としては、そういう事実を変えることはできません。何う前に丹羽大使と話をしました。丹羽大使も同じ、隣関係は変えることはできません。日中関係の道は狭いといい、たまに非常に太陽、雨降りもある。ただし、これは隣村としてやっていかねばならない。ここは本当に、さっき博物館を見て、長崎の歴史を見て、本当に知事、週末に上海に行きましょう。非常にすばらしい風景ですよ。今の中国、上海も含めて、空気が汚い、食品の問題もいっぱいある。だから、もし長崎のいいところを宣伝すれば、みんな来るかもしれない。政治とは関係ありません。自分のために、自分の家族のために長崎に行ってもいいんじゃないかと、そういうことだと私は思います。

○朱座長 一通り皆様から本当にそれぞれヒントになるような話があったと思います。

後藤さんからは、本当にローカル対ローカル、また、問題があるから、環境とかそういう問題をめぐって交流するというようなお話がありました。

岡田さんと張石さんは、長崎のよさを具体的に中国人の知っているイメージに出てくるような話をもってアピールすると。中国では確かに隠元、孫文、鄭成功ということを知らない人はいません。そういうところを、彼らをたどるルーツとか、彼らにまつわる観光コースという設定は確かに非常に魅力的かなと感じました。

松原さんは、心のつながりというところをどのように発掘していくか。それは最終的に長崎モデルとして日中両国に示していくということ、本当にこれが1つのキーポイントだと思います。

吉田さんは、1つは、長崎、広島がある、戦争の悲惨さということを改めて日中両国の若者、戦争を知らない世代に知ってもらって、軽く戦争などということを口にすべきではないというところを改めて示していくということも大事だというご提言と、そして吉田さん

と王柯さんは、ナショナリズムの概念、コンセプト、ネーションステートという欧米からの概念を超えた東洋の共通性、こういう文化ということを経済の今の状況にまさに体现されているものをどのように実践化のところからコンセプトのところまで持っていくか、日中交流の一つの理念にしていけないかと、私は本当にそのとおりだと思うんですね。

そういう中で、海というのが、今まさに日中あるいは韓国を加えて海の争いになっているんですけれども、長崎と中国、まさにこの概念を逆転して、歴史から今後もこの海を交流の突破口にするというようなこと。それは当然、フェリーなどもあるんですけれども、私は今後、東シナ海を共同で観光するルーツにしたい、ないしここで海の共同牧場、共同漁場、それらのことを一つ一つやっていくというような発想の転換というのも重要ではないかなと感じました。

王柯さんから、特に長崎を紹介する本という話がありましたけれども、それは私自身も考えていたことなんですね。今の日中の中に、実はそのような仕掛け、交流というのは既に幾つかあります。東京の作家、石川好さんが中国から頼まれて、湖北省と日本、そのような本をつくったんです。そのような本があると、やはり湖北省と日本とのつながりということは皆読む人がすぐにわかるんですね。今、上海と日本という本も私の知っている限り 2 冊出ています。長崎はせっかくだいいものを持っているので、例えば中国人の作家を呼んで、中国人が理解しやすい形で紹介するというのも確かに重要ではないかなと思います。

張石さんは、島のレトリックな、空虚な、そのような紛争以外のことも、広い視野、視点で共通の利益で考えていくと。また、具体的に隠元とか、そういうことの流れを進めていくこと、テーマ旅行というところのご提案、本当にそのとおりだと思います。張煥琦さんは、特に映像をもって長崎を中国に紹介するというようなことは実はいろいろできると思うんですね。

それを踏まえて私自身が 2 つだけ提案をいたしますと、長崎県は、先ほども天野課長から説明がありましたが、姉妹関係は主に福建省としている。それと同時に、友好交流関係に関する同意書というのは、武漢・湖北省、また上海と持っている。つまり、もうちょっとこういうような形式を広げてやるということができるので、今の中国との交流は、中国の内陸部との交流ということは非常に大事で、私たちは 2 年前に雲南省に行きましたけれども、雲南省政府から正式に頼まれたんです、日本とそのような交流提携関係を持ちたいと。内陸部は、かつての戦争と余り関係がない、あるいは今考え方としてそれなりに特に日本のよさというところを交流したいというような考えがあって、そのようなところをそれぞれの地域間で姉妹都市、姉妹省、市関係ではない、もうちょっと友好交流関係とか、そのような形で広げていくことも確かにできるのではないかなと思います。

そういうような具体的な交流の話はまた後でできるとは思います、残りの 10 分ぐらいの時間で、特に今の日中関係全般について、もちろんさっきのお話も踏まえて、これからは特に指名はしませんけれども、順不同で、ぜひそれぞれまたご発言いただければと思います。

す。王会長、森永部長を含めて、皆さんからお願いします。

○長崎華僑総会 王会長 全然こういう場にはふさわしくない長崎のちゃんぽん屋のおやじなんですけど、父も母も中国から来た華僑 2 世ということ、今、長崎の華僑の会長としてこういう環境にいること、僕は華僑として生まれて非常に誇りを持っているし、日本人にもなれない、また中国人にもなれない、長崎の華僑として一生ここですばらしい長崎に住んでいるんですね。

その中で、非常に気になることは、先ほど松原さんが言われたように、長崎モデルとして、先ほどの中村知事さんの話にあったように、その時代に久保知事さんの非常に勇気のある発言だったと思うんですね。田中角栄さんが中国に行ったというのは大変な英断だったと思うんですね。僕は、先ほど後藤さんが言われているような話の中には、日本の政財界の中にまだ 80 年前の中国に対する認識が色濃く残っている。そういうのが日本全国の報道関係の中で、だから先日の鳩山さんが訪中しての談話とか丹羽大使の発言とか、そして山口代表が行かれても、それはほんの小さな、非常に好意的な発言としては受け取れない、そういうのが今の日本のマスコミじゃないかなと。

私たちが在日の華僑の中では、日本で生活しているからずっとこらえておりますけど、恐らく日本にいる華僑のみんなが煮えくりかえっているのは、この間、東京都知事を務めた人の発言が、事あるごとに物すごく許しがたいことをわざわざ発言し続ける。それを選ぶのが日本の今の国民なんだと。そういう背景が今日本の中にあって、そういう中で先ほど松原さんが言われたように、長崎にはすばらしい、伝統的に中国と仲よくする。今の中村知事さんも一生懸命それに邁進していただいている。私たち華僑にも大変理解がある。その中で、今、長崎に赴任されている李総領事は、歴代の総領事の中でも、もちろん中国の総領事としての仕事の上に、長崎県人として、長崎県人の代表だということで、今日皆さんが総領事さんの案内を見ただけでも、その情熱がわかると思うんですね。

そういうことで、日本の一地方の長崎のこの中国への思いというのを、先ほど松原さんが言われたように長崎モデルとして発信する、それがマスコミの非常に大事なところじゃないかなと、私はそのように思います。

以上です。

○長崎新聞 森永氏 長崎新聞の森永でございます。今、王会長がおっしゃったことは全くそのとおりだと思うんですけども、確かに日中関係が深刻で、それに従って中央のメディアの報道というのも非常に危機を煽るといいますか、危機を非常に深刻に分析する報道というのが主流だと思うんですね。それはそれで必要なことなのかもしれないんですけども、ここ長崎にいますと、私は長崎で取材して報道しているだけなので、知事であるとか、李総領事とか王会長を超えるようなエピソードは何も持ち合わせていないんですけども、今あっているランタンフェスティバルにしる、ペーロンにしる、王会長がいらっし

やる新地の中華街、龍踊り、そういうふうには中国ないし中国とゆかりのものだなというのを市民、県民が認識している文化というのは完全に普通の生活なんですね。それが例えば日中関係が悪化したからといって、ランタンフェスティバルを開くなという意見が出てくるかという、そう思っている人もいるのかもしれないんですけども、まあ、主流の意見ではないです。

それで、メディアも新聞もテレビも、今日、取材の方たちが見えていますけど、これだけ日中関係が険しいといっても、ランタンフェスティバルが近付いてきたら、一生懸命、今年はどういう内容になる、今年はどういう人たちが主役になる、今年ランタンが何個出るとか、そこまで言うのかという感じもしますけど、そういう報道を非常に手厚くやって、それが普通なんですね。日中関係が悪くない時もそれが普通ですから、もちろんそういう姿でやってきているわけです。やっぱり一応メディアなので、県と長崎市とかがやっている施策には、1回1回疑問点とか批判というのはこちらから指摘することがあるわけですが、事、対中国政策に関しては、長崎県が行っている方向、長崎市が行っている方向に批判的なメディアは余りないんですね。そこは普通にやってしまうところがあるんだと思います。

大事なのは、先ほどから東京、北京というお話が出ていますけれども、それとは別チャンネルが、別のルートが長崎にはあって、それは別に特別今だからこうしているということではなくて、自然にそうなっている。今後もそうであるというような立ち位置をずっと長崎は継続していかなければならないんじゃないかなというふうに思っています。

蛇足ですけども、これは知事が一番ご存じですが、対韓国に対馬というものは割と似た立ち位置といえますか、釜山と非常に長い交流の歴史があって、あちらから非常に親近感を持たれていて、今、日韓関係も相当なものですけれども、そうなってもやっぱり対馬には観光客が来るんですね。そういう立ち位置というものを長崎県の対馬という離島は持っていて、そこも似ている。それもまた長崎県であるということをちょっとご紹介させていただきたいと思います。

以上です。

○共同通信 岡田氏 日中関係で一言だけ申し上げておくと、恐らく昨年9月、今回の尖閣で喚起された大きな反日というものの底流には、皆さんよくご存知のとおり、中国における経済格差の問題があると。中国共産党としては、ガス抜き、圧力の受け方として反日カードを使ってしまったということは、これは事実としてあると思うんです。もう一方、日本側がなぜこんなにナショナリスティックに反中に傾いたかといえ、この20年間の日本経済の長期低迷があると思うんです。それは主に新興国の台頭によって日本の国内産業がかなりやられてしまったという思いがある。それがベースにあって、その上に現状があるということをもっと認識しなければいけないと思うんですね。それは両方とも経済的な問題がベースにあるということ。もちろん精神的な意味での交流だとか、そういうものは非

常に重要だと思うんです。それは人間の考え方、思想とか信条とか、そういうものの中のどこかに位置されるものとして必ず必要だと思いますけれども、一方、ベースとして経済で起きている以上、この経済の問題が解決されない限り根本的に打ち解けない問題もあると。

ただ、その中でお互いに共通している課題に対する調整、つまり、よく両親が一番仲がいいのは子供が幼い時だと、なぜならば両親ともに子供を見ているからというのと同じで、やはり日中が仮にある種の協調関係を築けるとしたら、共通の課題を見つけていくということなんですね。それもまさに東京、北京という国家のレベルでやることもあるし、先ほど申し上げたようにローカル・トゥ・ローカルでやるレベルもあると。それぞれが重要な意味を持っている。それは先ほど王会長もおっしゃっていたような精神的な意味でのつながりもあるし、また、何か個別のテーマ、長崎県が持っている特質、これが中国に対して何か与えられるものがあるんじゃないか。長崎をベースにしてそれをお互いに学び合うこと。また逆に、長崎が中国のあるところに行って学ぶことができるんじゃないかという、その同じものを見る、対象を見る、両親にとっての子供みたいな、そういうものがあらゆるレイヤーで今の日中関係に必要なというふうに考えております。

○朱座長 残り時間は余りないですけれども、何か発言される方はどうぞ。

○神戸大学 王（柯）氏 さっき後藤先生のお話を伺いまして、また、王会長のお話を伺いまして、両方とも非常に合っているところがあると感じました。

1つは、最近感じたことは、日本国民も、あるいは中国国民の中にも、政治化していると非常に感じたわけですね。国を代表する、あるいは国益を大前提であるというお話の記事は本当に影響を落としています。特に、私も文字、活字を用いてきた人間なので、同じ事実も伝え方によって全く違うイメージになりますね。本当にマイナス的によくないと、控えるべきではないか。これは、日本のマスコミだけではなく、中国も同じ。

最近、日本国の政治家、あるいは中国の政治家、国を代表するような人間になって、積極的にいろんな背景があることを理解しないといけないと感じております。例えば、中国共産党の場合あるいは中国政府の場合は、昔みたいに中国革命を起こすことができなくなっているという現状もあります。というのは、それぞれの国の中に抱えている問題、内部の問題は1つのはけ口としていろんなものを使ったわけですね。例えば中国の反日デモというのは、若者、あるいは農村から来た、あるいは農民の人たち、あるいは地方から都市部に来た若い大学生たち、これは自分たちの国に対する忠誠心を示す場として、ナショナリズムの一番いい解決口として、あるいは一番いい対処として使ったという、そのような現実が今起こっています。日本はどうですか。日本も同じですね。日本は本当に私の大学で使っている言葉、周辺化された、あるいは周辺にされた人間たちは、中央に対して自分の正当性を主張する時によくナショナリズムを使って言うんですね。石原と名指ししては

いけないですけど、本当に自分こそ日本を愛して大事にしてというふうになれば、本当にかえって日本の利益の損害を与えるということですね。

ここで、私と朱さんは、大分前からシンポジウムという一つのキーワードを出していました。日中の共同知ですね、共同の知恵、知識は何か。あるいは私たちの思惟の中に、あるいは私たちの価値観の中に共通するものは何か。東アジアの共同地域に住む方、新聞の方、あるいは私たちも学者として、そういう共有できるようなものは何かということ私たちが研究し、あるいは強調しないといけないということでもあります。

しかし、この背後にあるのが国であれば、国家であれば、政治であれば、そのようなことは本当にできません。国政よりむしろ民政ですね、民政交流が大事であります。この長崎でみんな見てきたのは、本当にまさに一人ひとりの人間の間の交流で始めているんな大きなことができました。政治ではなく文化を強調する、文化の力を考えてほしいということとはぜひこれから一緒にやった方がいいと思います。

○朱座長 もう時間が過ぎましたので、最後に知事の方から、まとめとともにお言葉をいただければと思います。

○中村知事 本当にありがとうございます。大変貴重なご示唆等をいただきまして、心からお礼を申し上げます。

実は、今日、この場に出席をさせていただく前に、冒頭申し上げたように、これから長崎県は日中関係の改善に向けてどういった取組をやらばいいんだろうかと相当悩んできました。

そういった中で、1つこういった考え方はどうだろうかと思ってまいりましたのが、日中双方の若い世代の人たちを一堂に集めて、例えばいろんな価値観の問題でありますとか、あるいは専門的な分野で社会情勢の動き等をテーマにして協議、意見交換をするような、あるいは夜は懇親を深めるような、そういった場を持つということはどうなんだろうかと。

実を申しますと、なぜこれを考えたかといいますと、ご承知のとおり、長崎県は対馬を舞台に日韓関係の国際交流の中でも非常に大切な役割を果たしてきたわけでありましたけれども、やはり二十数年前までは相当厳しい両国民の国民感情がございました。そういった中で、実は対馬藩の儒学者に雨森芳洲という人がおりまして、これは盧泰愚大統領が日本に来られた時に国会演説の中で、対馬藩の雨森芳洲は、精神交流、お互いに欺かず、争わず、誠信の交わりをするという考え方のもと、日韓関係を構築してきた方であります。そういった精神に学ぼうということがございました。それで芳洲外交塾というものをつくりまして、日韓の一般の市民の方に一堂にお集まりいただいて、そういった場を設けてきた経過がございました。最初はやはり日本人の若者の参加者も、戦後、歴史認識等を含めて、相当厳しい議論があるのではないかと戦々恐々とした思いで参加していた時期もございましたけれども、現在はもう既にご承知のとおり、まさに両国の文化も開放されております

し、日本の女性や若い人たちもまさに韓流ブームということで、一挙にその垣根が低くなったような気もいたしております。

一方、日中関係を考えます時に、まだまだそういった状況までは至っていないところがあるんじゃないのかなと。そういうことであれば、やはり日中関係の構築に一定役割を果たした長崎県として何らかのテーマを設けながら、そういったシンポジウムなり、あるいは座談会なり、意見交換会なりを、これは時間がかかるだろうと思いますが、継続して取り組んでいくような方策がないだろうかという思いが1つございました。まさに心の交流、相互理解の基本に結びつくような部分ではなかろうかなと思っております。

そうした時に、先ほど吉田先生のお話の中に、まさに普通に仲よくすることがタブー視される傾向がある。これはまさに対馬がそうでありまして、対馬市のホームページにハングル表記をしましたら、全国から抗議の電話、メールが殺到いたしました。あるいは防衛施設の隣接地が韓国資本に買収されているというようなことも表明がありまして、非常に批判を受けました。

また、先般は韓国の県・道の議会で、対馬は韓国領土だというような議決がなされました。ところが、対馬の方々はどういう対応をしたかということ、そんなの全く関係ない、我々は韓国とはお互いに信頼関係ができていたということ、大人の対応が双方でできる関係になっている。そういったことなども視野に入れながら、まさに日中関係もそういった少々のことではびくともしないような関係を長崎からつくっていきたい。

そういうことで先ほどお話がありましたゆかりの方々、鄭成功があり、隠元があり、王直があり、さまざまなそういった史実、交流の歴史を持っておりますので、昨年まで孫文先生と梅屋庄吉の関係に着目をして、そういう情報発信をしまいいりました。来年度以降もそういった取組を続けていきたい。これは日中双方で情報発信をしたい。

実を言うと、長崎県では「ながさき歴史発見・発信事業」ということで、東京でいろんな方々をお招きして長崎の歴史を紹介するような取組を行っております。大体500人ぐらいいつもお集まりいただいて、長崎独自の歴史をご紹介しているのでありますけれども、そういった場等も活用しながら、歴史上の人物に焦点を当てながら新しい取組を進めていこうと、今、こういう計画もしているところであります。

それともう1つ、こんなことができればいいなと思っておりますのは、実は長崎県では、長崎サミットということで産学官でいろんな課題について協議をする場がありますが、そういった協議の中で留学生支援センターを立ち上げていこうという取組が始まりました。実は本県は、留学生を1,500名ぐらいいお迎えしているんですが、これを倍増しよう、3,000名に増やそうと。そのうち大体7~8割くらいの方々中国からお見えでございます。そうであれば、もっともっと留学生の方々においでいただく、あるいは中国の大学を誘致できないだろうかといったようなことも実は考えているところでありまして、長崎に中国の大学を、分校なりを開設していただいて、多くの方々をお迎えして、長崎の雰囲気、あるいは長崎の県民の思いを感じていただきながらお帰りいただく。そして、長崎との交流の

パイプを将来につないでいけるような取組ができないだろうかと、そんなことなどを考えているところでもあります。

今日は、本当に大変貴重なご提言をいただきました。申し上げたように、福建省、上海市、湖北省とも新しい友好関係が締結できたところでありまして、こういったいわゆる姉妹都市にこだわらず、もっともっと友好関係を広げていく手法もあるだろうと思っておりますので、しっかり今日のご提言を大きな参考とさせていただきながら力を注いでまいりたいと思います。本当に今日はありがとうございます。今後ともお力添えを賜りますようお願いいたします。(拍手)

○天野国際課長 皆様、貴重なご意見をありがとうございました。本日はありがとうございました。